

評論

〈特集〉心の癒しをめぐる

人は宗教で癒されるか

橋爪大三郎

Habizume Daisaburo

Illustrations by Matsumoto Youko



ここ数年、宗教への関心が高まっていた。

去年、突然にオウム真理教の事件が起こったので、それまで関心なかった人びとも、否応なしに宗教に目を向けざるをえなくなった。宗教は、テレビでも視聴率のとれる恰好の話題のひとつとなっている。しかしその底流として、宗教に関心を持つ若い人びとが着実に増えつつあった。その手応えは、ここ数年私が大学で開講している「比較宗教社会学」の講義でも、確実に感じることができた。

* 宗教が、特別な意味あいをもって意識されるようになったのは、冷戦構造の解体、イデオロギーの終焉と関連がある。

これまでの半世紀、冷戦が世界の現実であり、社会主義圏も健在だった。冷戦構造のもと、西側自由世界の一翼であった日本に住むわれわれにとって、マルクス主義のイデオロギーは、この社会のもうひとつの可能性を指し示すという明確な意味を持っていた。しかし、社会主義圏の行き詰まりが明らかになった八〇年代、「大きな物語はもう終わった」（すなわち、マルクス主義のように、

この社会の現実すべてを包括する時間軸・空間軸を与えるイデオロギーはもはや存在不可能になった」とする、価値相対主義の時代が幕を開けた。ベルリンの壁が崩壊し、湾岸戦争のミサイルがブラウン管のなかを飛び交って以降の九〇年代、このことは誰にもはつきり意識できる現実となった。マルクス主義も、それ以外のどんな支配的なイデオロギーや哲学も、中生代の恐竜のように姿を消したあと、われわれの生きる現実には、あまりに世俗的な、どんな理想からも見放された寒々としたものに見える。

こんな時代を生きはじめた若い人びとは、マルクス主義やイデオロギーを時代遅れの過去の遺物と見ながらも、しばしば、この社会にくつきりとした方向性を与える理想がほかにないものかと考えあぐねる。それが、世俗の社会のなかに見つからないものならば、自分の心のなか（精神世界）に見つけるしかない。そういう渴望に与えられた名前（キーワード）こそが、宗教なのである。

オウム真理教タイプの宗教は、今後も続発する？

九五年三月の地下鉄サリン事件以来ほぼ半年の間、日本人は、オウム真理教という奇怪な宗教団体の実態に耳目を奪われ続けた。それは、これまで人びとが常識としてきた宗教の枠に、収まらないものだった。宗教と、過激なテロリズム。このふたつが結びついていても不思議でないことを、多くの日本人はこのときはじめて知ったのである。

ところが、日本以外の社会では、過激な宗教ゲリラなどめざらしくも何ともない。イスラム原理主義グループや武装ゲリラ組織、シーク教過激派。ユダヤ教にも、キリスト教にも、ヒンドゥー教にも、多くの秘密結社や武装グループがある。要人暗殺や爆弾事件、ハイジャック、銃撃戦や集団自殺と、手段を選ばぬかすかすの過激な事件の背後には、必ずと言っていいほど宗教ゲリラが控えていた。多くの人間を組織し、長期にわたって、法を破り命を捨てることもいとわぬ任務につかせることができるのは、イデオロギーか、さもなければ宗教的信念なのだ。

* オウム真理教は、仏教系の宗教に分類されていた。仏教はこれまで、武装闘争やゲリラ活動を

ラ活動のかたちを取ることが少なかった。（ただし、中国の少林寺や日本の僧兵、一向一揆の例もあるように、まったく武装が不可能なわけではない。）明治以来の数々の新興宗教も、武装して過激な行動を起こした教団は皆無にひとしい。そこでオウム真理教も、突飛なことを言っただけで、よもや今回のような事件を起こすことはあるまいと、みな高をくくっていた。しかし彼らの教義は、仏教のほかに終末論や超能力信仰を寄せ集めた独特のものであって、信者たちに武装や犯罪行為や殺人を命じることができた。政府・公安当局がオウム真理教に破防法を適用する方針でのぞむことにしたのは、このことにシヨックを受けたからである。

オウム真理教はいま、幹部のほとんどが逮捕されて獄中にあり、宗教法人の解散、破防法の適用による団体活動の禁止に追いこまれていく。もはや組織実態としては、息の根を断られたと言ってもいい。それでは、今後、オウム真理教のようなタイプの宗教ゲリラが現れる可能性はあるだろうか？ ある！必ず、もっと大々的なかたちで現れると言って間違いない。宗教のかたちをとった大規模な国際ゲリラ活動

が、二二世紀を悩ませる大問題のひとつとなるだろう。
なぜ、そのように断言できるのか。それを理解するため、まず、そもそも宗教がどういうものかについて、復習してみよう。そして来世紀、人類社会がどのような困難に直面するのかわ確認してみよう。

二二世紀に、こんな宗教が現れる

宗教の定義はいろいろある。ここではそれを、こんなふうと考えてみよう。

どんな宗教も、「いま・ここ」を超える、何らかの方法をもっている。一神教ならば、それは神だし、ヒンドゥー教や仏教ならば、それは悟りだ。われわれ人間は例外なく、限られた時間・空間、すなわち「いま・ここ」に縛られている。われわれが見渡し、経験することのできる範囲、それが社会の現実である。このような現実の制約を抜け出し、その外側に、「いま・ここ」では実現されないなにかを確信する。それは、経験を超えているので、ともかくも「信じる」しかないものなのだ。およそどんな宗教も、こうした構造をもっていないであろうか。

れるしかない。彼らにとっては、科学も宗教も違いないものなのだ。科学が専門に細分され、誰もその全体を見通すことができなくなっている。多くの科学者にとっても、事情は似たりよったりである。ある分野の専門家が、別の分野ではまったく初歩的な知識さえなかつたりする。いっぽう宗教家は、この世界を

このような理解にもとづいて宗教を結論づけると、こんなふうになる。「いま・ここ」で現実を経験できない、あることがらを確信（して行動）すること。

ここから、宗教は、つぎの三つの特徴をおびるはずである。

- (1)それは、現実に対する強烈な不満・否定の感情や、現実から脱出したいという強固な意志を表現することができる。
- (2)それは、承認しがたい現状（「いま・ここ」にある不完全な世界）を、理想的な未来（完全な世界）によつて補完し、多くの人びとの人生に充実した意味を供給することができる。
- (3)それは、多くの人びとを、同志的結合によつて結ばれた緊密な結社に組織し、大規模で長期的で結束の固い行動を起こすことを可能にする。

オウム真理教は、こうしたものだった。イスラム教やキリスト教といった既存のさまざまな宗教も、少なくともそれが成立したばかりの頃は、こうしたものだった。宗教に限らず、マルクス主義のような哲学的イデオロギー（世界観）も、こうしたものだった。それらは最初、誰かひとり

の人間が考えた思想・イメージ・世界観であつて、個人的な色合いの濃いものだった。だが、いったんそれが人びとを捉え、ひとつの社会運動として出発すると、現実には歴史の行方を左右するような、巨大な勢力となる（かもしれない）のである。

*

宗教とイデオロギーには、(1) (3)のような共通点があるが、いっぽう相違点もある。両者の違いは、現状を脱出して理想的な未来に到達するための「合理的で現実的な方法論」をもっている（ことを証明する必要がある）か否か、である。

「科学的社会主義」の看板を掲げたマルクス主義は、彼らの方法論（計画経済や農業の集団化）が合理的でも現実的でもないと判明していくにつれ、急速にイデオロギーとしての権威を失い、人びとを魅きつける力を失った。八〇年代以降、イデオロギーの時代が終焉したのは、この世界の現状を根本的・理想的に改善する「合理的で現実的な方法論」などというものを、もはや誰も提示できなくなったからである。人びとは、なにかある世界観をもちさえすれば、この世界をよりよく改造できるアイデアが手にできるとは信じなくなつた。

た。

イデオロギーが舞台から退場すれば、残るのは宗教のみである。宗教はそもそも、「合理的で現実的な方法論」を人びとに示す必要はない。非合理で非現実的であろうと、それなりのストーリーを示せばよいのである。こうして、二二世紀は「宗教の時代」なのだ。

宗教の時代の到来は、科学の時代が過ぎ去ることを意味しない。それどころか、科学と宗教は共存する。科学技術の有用性が高まり、人類が科学技術に依存する割合が高まれば高まるほど、宗教の果たす役割も大きくなる。奇妙に感じられるが、そうした共存が不可能でないことを、オウム真理教はわれわれに示した。

*

宗教がしぶとく生き残っていくのは、科学知識が人びとのあいだに公平に分配されないことと関係がある。科学知識は、教育を通じて普及する。そして教育は、所得が高くなければ受けられない。結果として、科学知識を身につけ、その恩恵を享受するのは、先進国の、ごく一部の人びとに限られる。それ以外の人びとは、科学の原理を理解しないまま、その結論を正しいものとして押しつけら

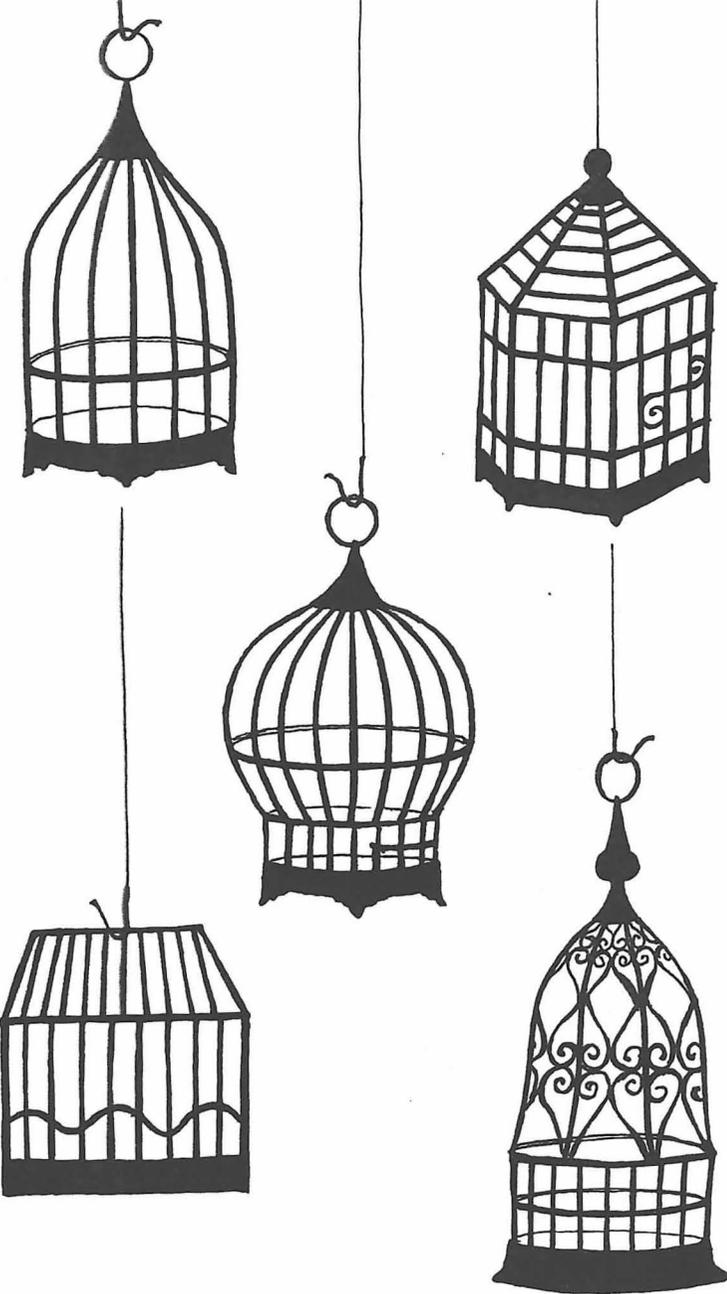
環境／貧困／人口のトリレンマ

もうひとつの大事な点は、二二世紀に人類が直面する問題が、科学技術で簡単に克服できない性質のものであることだ。

ここ二十年來、オゾン・ホールや温室効果ガスはマスコミでもたびたび

取り上げられ、地球環境問題が行く手に立ちほだかっていることを、だんだん人びとは理解するようになってきた。だからと言って、問題が一步でも解決に近づいたわけではない。相変わらず石油は消費され続け、森林は減り続け、人口は増え続けている。現在の科学技術をそのまま未来に延長しても、素晴らしい社会が待ち受けているわけではないのだ。

しかもこの問題は、ただ単に解決が難しいのではない。ある問題を解決しようとする、かえって別の問題が解決しにくくなるという、トレード・オフ（あちらを立てればこちらが立たず）の関係がある。たとえば、貧困を根絶するには、経済を発展させなければならない。経済を発展させようとすると、エネルギー資源（石油やウラン）が枯渇してゆく。石炭を燃やせば、炭酸ガスが出る。温暖化が進み、地球環境はいつそう破壊される。貧困が克服できなければ、人口は増え続け、貧困層はますます拡大するだろう。専門家の予測では、二〇五〇年に地球人口が百億を突破そのあとも急カーブで増え続ける可能性が高いという。それだけの人口を養う食糧も、エネルギーも、環境も、地球の上にはもう残っていない



だろう。

環境／貧困／人口のトリレンマ。これを解決する手立ては、科学技術の道具箱をひっくり返しても見つからないのである。

*

こうして、いわゆる南北問題（先進国と発展途上国の格差）が、二一世紀を通じてますますその重要性を増し続け、国際社会の安定をゆるがせることになるだろう。一九世紀は地球の分割をめぐる列強の争奪、二〇世紀は世界の覇権をめぐる国家グループの対立で明け暮れた。それに代わって二一世紀は、地球資源の分配をめぐる南北間の抗争が、最大のテーマとなるはずだ。

地球環境問題という名前は、どうしても地球や環境に問題があるかのように聞こえる。だが実際には、地球や環境に大きすぎる負担をかけている、人類社会の問題なのである。人類社会が、爆発的な人口増加や、貧困や、経済発展に歯止めをかけない限り、南北の抗争はますます抜き差しならなくなっていくだろう。

北朝鮮型やけつばち国家が 続出する？

国家だ。冷戦が終結しソ連が解体した結果、その存立基盤は失われ、崩壊は時間の問題だ。それを首の皮一枚で喰い止めているのは、国民のあいだに行き届いたイデオロギー教育（締めつけ）と、情報統制である。南の国々は、北朝鮮のようなおあつらえ向きの条件にはめぐまれないだろう。だが南の国々には、先進国を敵視する宗教的な信念が広まりやすい。もつともありそうなのは、突飛な宗教団体が民衆のあいだに組織され、なかば国家に公認されたかたちで、国際的なゲリラ活動を展開することである。

先進国との宗教百年戦争

どんな伝統社会にも、その社会なりの想像力のパターンがある。それが産業文明と接触すると、新興宗教となつて華開く。

日本の新興宗教は大部分が、神道系、仏教系である。そのうち、仏教系のいくつか（創価学会インターナショナル、オウム真理教など）は、海外への布教にも熱心だが、一般に外国に普及させるのはむずかしい。南の国々にもつとも広くゆきわたっているのは、キリスト教とイスラ

そうした厳しい緊張のなかで、新しいタイプのさまざまな（突飛で、ことによると危険な）宗教が、主として南の国々の人びとのあいだに広まっていくであろう、と私は予想している。

まずあなたが、これら南の国々にこれから生まれる人びとであったとしたら、この世界がどのように見えるかを想像してほしい。

あなたの国は、人口が多い。しかし、所得は低い。穀物など基本的な食糧にもこと欠くありさまだ。テレビのニュースなどで、先進国の様子を見聞きはできる。そこでは人びとが、裕福かつ安楽に暮らし、穀物はもちろん、肉や野菜も豊富である。科学技術や産業も発達し、あなたの国では作れない商品を沢山作っている。あなたの国はそれを、貴重な外貨を払って輸入しなければならぬのだ。あなたの国は資源も乏しいし、これといった産業もない。産業を起すための外貨も、技術も人材も、さまざまなインフラも不足している。もとは先進国の植民地で、経済的な自立を果たせなかった後遺症に悩んでいるのかもしれない。教育のチャンスもなく定職にもつけなかったあなたは、都市のスラムでうだつのあ

がらない一生を過ごす羽目になりそうだ。外国に出られれば、働くチャンスはあるかもしれないが、北の先進国は固く門を閉ざして、ビザを取ることなど不可能だ。密出国のブローカーに頼んでもいいが、目の玉の飛び出るような金額を要求される。地球を船にたとえれば、あなたが押し込められているのは、船底の三等船室。一等船室の国々は、たまたまひと足先に産業化に成功したおかげで、数々の特権をひとり占めしている。彼らが鉄も石油もウランやそのほかの資源も使い切ってしまったおかげで、それらはもうなくなつたか、価格が高騰している。彼らがエネルギーをむやみに消費しすぎたおかげで、地球が温暖化し、あなたの国は経済成長もままならない。世界の現状（いま・ここ）は、こんなにも耐えがたい。だが北の先進国は、核兵器などで武装し、圧倒的な軍事力を持っており、力づくではかなわない。こんな不公平があるだろうか。彼らは、口では地球の未来を心配し、南の国々を援助するなどと言うが、実際には南の国々のために、自分たちの特権を手放す（富を分け与えて同じスタートラインに立つ）つもりなど毛頭ないのだ――

ただしその想像力の範囲を超えて、他民族、他の文化圏にまで拡がることは少ない。南の国々には、固有信仰が変形して生まれた、多彩な新興宗教が細かく住みわけているものなのだ。

*

ますますひどくなる人口問題と、貧困。南の国々が一様に置かれることになる状況を、これまでの正統宗教も、ありきたり新興宗教も、すくい上げることはできない。人びとのあいだに、現状からの脱出を願うエネルギーが蓄積されていく。世界中にフラストレーションがうず巻き、爆発のきっかけを待つ、危険な状況が生まれる。そして、この状況を現実的・合理的に解決する方法はない。

そんなとき、現状を脱出する非合理的なプログラムが、宗教のかたちで湧きおこるのは、ほとんど必然だと思われる。宗教的天才が各地に現れ、さまざまな教義を唱えるだろう。そのなかのいくつかは、新興宗教の域を超え、地球大の影響をもつだろう。そのなかみは、おそらくこんな具合である……

①ローカルな文化、貧困のただ中から生まれながら、人類の観念に立脚し、地球大の人類共同体を相手に

*

冷戦時代であれば、こうした状況を、資本主義や帝国主義のせいにするのができた。自由主義の側に立つても、社会主義の側に立つても、先進国（アメリカ／ソ連）からそれなりの援助を引き出すことができた。ポスト冷戦時代になって、その手は使えなくなった。国際社会は、世界単一市場へ向けて歩んでいる。市場には自由競争のルールがある。そこから這い上がれなければ、能力がない（自分が悪い）ことになってしまふのだ。

二〇世紀の最後の二〇年は、アジアNEESが目ざましく台頭した。二一世紀には、中国を含む東アジアやインドなどの国々が、新たな経済大国として登場するだろう。彼らはいわば、勤勉な優等生である。そこからも取り残された国々は、彼らを横目に、いつそう惨めな敗北感にうちめされる。一発逆転の妄想にとられる国々が現れてもおかしくない。

そうした国々は、特異な宗教国家・北朝鮮のような道を歩むのだろうか。北朝鮮は、冷戦の産物であり、ソ連の軍事援助なしには考えられない

する。

②これまでと異なつた時間軸（歴史の観念）に立脚し、先進国の繁栄／途上国の貧困を生み出した近代史を相対化（もしくは否定）する。

③国際法や主権国家体制など国際社会の秩序を不当なものとし、ゲリラ的実力行使によって資源の再分配をはかつてもよいとする。

④インターネット（その頃まだあるとして）などの情報通信や英語環境に適応した、国際的な情報発信を行なう知性と能力を有する。

⑤キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教など、既存の大宗教から大量の改宗者を獲得できるような、ロジックの受け皿をそなえている。

⑥そのいっぽう、先進国との敵対関係は、一種の宗教戦争と意識され、先進国から非難・攻撃されればされるほど、自らの正当性が証明されたとする。

*

S・ハンチントン『文明の興亡』で、キリスト教文明に対するイスラム教文明と儒教文明の挑戦が、来るべき時代を特徴づけるとした。なるほど、二一世紀初頭の国際情勢にはそうした傾向もあるかもしれない

い。しかし、二〇五〇年の時点で重要なのは、南の国々に生きる六〇億あまりの人びとがなにを考えるか、である。彼らはキリスト教でも、イスラム教でも儒教でもなしに、むしろ①⑥のような信仰もしくは信念を抱くであろう。それはかたちを変え、先進諸国とのあいだに繰り返す衝突をうむ。途上国と先進国との、宗教百年戦争である。

宗教はふたたび国家を超えるのか

この宗教戦争は、具体的にどういうかたちをとるだろうか？

ポスト冷戦の時代を迎え、国際社会は、単一市場経済十主権国家を共通ルールにして営まれている。単一市場経済とは、関税やそのほかの障壁を低くし、計画経済のような異なった経済体制を国ごとに運営するのはやめて、市場の論理を最大限に働かせようということ。いっぽう主権国家とは、国民国家を単位として、市場を通じてない再分配(税や福祉)の問題を解決すること。基本的にはこの組み合わせによって、人びとの生存を保障しようというのが、いまの国際社会である。

途上国の人口が爆発的な増加を続

け、貧困が拡大し、食糧がいよいよ不足するようになるか？

どうにもならない。食糧が不足すると、穀物価格が上昇する。そこで本来なら、穀物の供給が増えるべきだが、耕地面積が限られているので、増産がままならない。高価な食糧を消費できるのは、先進国だけである。世界単一市場のもと、南の国々では慢性的な飢餓が進行する。

もうひとつ大事な点は、主権国家とは本質的に言って、人間の移動を禁止する装置であることだ。先進国のあいだの移動は、比較的自由である。しかし途上国に対して、門戸は閉ざされたままである。その国は、国家主権を発動して、門戸を閉ざす権利がある。途上国の人びとは、合法的に出国して先進国に移住することができない。

単一市場のなかを、物資や情報は自由に移動する。しかし、主権国家体制のもと、人間の移動だけは厳しく制限されている。結果的に、資源は先進国に集中する。南の国々にとって、自分たちの国家は「収容所」の別名にすぎなくなる。

* 国家が現状のまま存在することに、合理的な理由があるだろうか？ た

たとえばアメリカが、あれだけの広大な土地を領有していることに正当性があるだろうか？ あれはもともとアメリカ大陸原住民のものだったのを、あとからやって来た白人のキリスト教徒が取り上げたものではないか。彼らに取り上げる権利があるのなら、われわれにはそれを取り返す権利があるのではないか。少なくとも、その再分配を求めてないが悪いだろう――

このような主張に対し、市場経済十主権国家のシステムは、原理的に対抗できるロジックを持っていない。まず市場にとって、初期条件(誰が何を所有している状態から始めるかという条件)は与件(市場の外側で決まったこと)である。それが決まらなければ、市場は始まらない。似たようなことが、国家にも言える。

国家は国民の権利を守るのだが、誰が国民であるかは国家が決める。国家は主権者である国民が創り出す。国家と国民の円環(ぐるぐる回り)は、合理的に基礎づけることはできず、とにかくそこに国家があるという事実(初期条件)から出発せざるをえない。アメリカ合衆国が存在するのは事実だとしても、それを合理的に根拠づけることはできないので

ある。

* とすれば、(たとえば『出エジプト記』のモーゼにヒントをえて)つぎのようにのべる宗教的天才が出てきたとしてもおかしくない。彼はこう主張する。「南の国々はエジプトであり、多くの人びとがそこで飢えと貧困の奴隷となって苦しんでいる。アメリカは約束の地、ありあまる食糧と工業製品に恵まれたカナンの地だ。さあ、私に続け。アメリカ大統領の軍勢がわれわれに襲いかかろうとも、勇気を出して海を渡れば、道は開けるであろう。これにちよって数百万、数千万の人びとが一斉に小舟に乗ってやって来たら、全員を機銃掃射で追い返すことなど不可能であろう。

南の国々の増えすぎた人口は、都市スラムに集中する。実質的にそれは、難民である。「鉄鎖以外に失うものがない」彼らが、生きるため、国境を越えようと思うのは自然のなりゆきだ。それが散発的でなく、信念にもつづいた組織された流れとなるとき、世界の危機は新しい段階を迎える。もしも彼らが死を覚悟すれば、その滔々たる流れを何者も阻止できないだろう。彼らに必要なのは宗教的信念であり、宗教が必要なきとき

れは生まれるのだ。

南の国々にとって、国境はもはや意味を持たない。国境を維持することによって、うるものは何もない。宗教を信じる人びとは、リーダーの指示があれば、喜んでそれに従うだろう。それは、国家意思の発動ではないから、戦争ではありえない。国際法上は難民、実質的に言えば死をいとわぬ殉教者たちが、先進国をめざして四方八方から殺到する。そういうシーンをわれわれは、遠からず目にするようになるのだ。

* 宗教によって人は癒されるか？

それは宗教が、何を約束するかによる。先進国の気弱な若者たちが、気の迷いですががりつくタイプの宗教など、私にはどうでもよい。私が興味があるのは、人口爆発に苦しむ地球で、軽すぎる生命にまつような意味を与え、必死で編み出される宗教だ。想像するのさえむずかしい過酷な状況で、なお人間の尊厳をかちえようとする行為。それを宗教が可能にするのなら、宗教は人を癒すと言ってもいいのかもしれない。

T

